火　と　水

――Miltonの詩のイメジ　II――

森　　道　子

キリストの苦難と死を嘆き悼むべく取った筆を置いて、未完のまゝ残した詩 *The Passion* (1630) より7年が経過し、Miltonは同寮生Edward Kingの死に遭遇し、その哀悼詩を依頼される。*The Passion* の時とは異り、古典ギリシア・ローマのpastoral elegyの伝統に立って友人の死を弔うMiltonは、その才能を遺憾なく発揮するのである。アイルランドへ向う船の難破により溺死した友への弔詩であるため、当然とはいえ、"Fifty of *Lycidas's* 193 lines are concerned with water"[1]で、水のイメジャリが全詩を貫いている。

> One of the most important of these elements ―― and one of the most startling, once it is seen ―― is the water imagery. Milton does not forget that King met his death by drowning. He makes much of the sea in this poem, and he makes much of water in general ―― the tear, the stream, the Galiean lake, etc.[2]

> From the beginning, accordingly, the sea is in the background of the reader's consciousness. Images of water have considerably greater prominence than images of trees and plants and have frequently been noticed by critics.[3]

その解釈、鑑賞も言い尽されている感があり、今更付け加える言葉はないと言えるかもしれない。しかし、あえてここでは、前稿 *Nativity Ode* の場合と同じく、キリスト教の神のpresence（臨在、現存）に関わる火と水のイメジに焦点をしぼって読もうと思う。

詩全体は異教の牧人が"the oaten flute" (33) あるいは葦笛 (188) を用いて奏でる"Doric lay" (189) であることは明白にされている。しかし、3楽章に分けられたこの詩は1楽章毎にキリスト教の調子を濃くしていくのである。まず、イメジも語彙もshepherdやsheepの象徴するものも、徹底して異教のpastoral elegyに倣う第1楽章の終り

に、“fame” (78) に関する訓戒を述べる Phoebus の言葉にはキリスト教的色合いが付けられる。

> Fame is no plant that grows on mortal soil,
> Nor in the glistering foil
> Set off to the world, nor in broad rumour lies,
> But lives and spreads aloft by those pure eyes,
> And perfect witness of all-judging Jove;
> As he pronounces lastly on each deed,
> Of so much fame in heaven expect thy meed. (78-84)

この色は第2楽章ではその半分を占めることになる。つまり、“The pilot of the Galilean lake” (109) と固有名詞は伏されているものの、St. Peter (ペトロ) によって、当時の英国のキリスト教聖職者たちの腐敗ぶりに痛烈な糾弾の言葉が浴びせられる。ペトロはキリストによって最初の priest としての shepherd に任命された者である。“Feed my lambs (sheep)”[4] と3度確認された彼の目に写る英国の羊たちの現状は惨憺たるものであり、“The hungry sheep look up, and are not fed” (125) なのである。

第1、第2楽章は共に、それぞれの中心テーマである poet-shepherd (詩人としての羊飼)、priest-shepherd (司牧者としての羊飼) のこの世での虚しさ、儚さ、無用性を嘆いている。詩人としても、牧師としても、将来を嘱望された King の夭折への弔慰から生れたものである。各楽章の締めくくりとなる Phoebus の言葉と、ペトロのスピーチとは、それぞれ、“a higher mood” (87), “the dread voice” (132) と、牧歌の調べとは異質な音色であることが示される。特に、ペトロの言葉は異教のイメジを圧倒し、その調べの流れを堰き止めてしまう。

第3楽章では、前楽章の終りの殺伐として、荒れ果て、腐敗し、伝染病に冒された (“Rot inwardly, and foul contagion spread” (127)) 羊の檻の醜悪な映像を覆い隠そうとするかのように、目もあやな花々の catalogue が繰り広げられる。悪臭と汚穢の漂う羊の檻に代って、古代ギリシアあるいは英国の美々しい花が色とりどりに咲きこぼれる谷や野が出現する[5]。しかし、それは “a little ease” (152) であり、“false surmise” (153) にすぎない。所詮、草花の生命は短く、朝開いても、夕には色褪せて散ってしまう。しかも、その花々を供えるべき墓に、遺体はない。真実なるものは “other groves, and other streams” (174) にしかない。つまり、*The Revelation* (『黙示録』) の著者の言うように、“the former things are passed away”[6] であり、“a new heaven and a new earth”[7] にのみ見出されるものである。そこに響き渡る小羊の婚宴の歌 “nuptial song” (176) は、同じくヨハネの『黙示録』の “they sung as it were a *new song* before the throne”[8]

であり、喜びと愛と栄光の中に大唱和され、涙は拭われ、飢えも渇きも、悲しみも死も跡方もなく消え失せる。

> They shall hunger no more, neither thirst any more; neither shall the sun light on them, nor any heat. For the Lamb which is in the midst of the throne shall feed them, and shall lead them unto living fountains of waters: and God shall wipe away all tears from their eyes.[9]

> And God shall wipe away all tears from their eyes; and there shall be no more death, neither sorrow, nor crying, neither shall there be any more pain: for the former things are passed away.[10]

第3楽章はヨハネの『黙示録』のvisionと歌の中に包含されてしまう。

こうして、第1、第2、第3楽章と移り進むにつれ、異教のイメジはキリスト教のイメジへと場所を譲っていく。言いかえれば、目に見えるものから、見えないものへ、mortalなものから、immortalなものへ、地上から天上へと変容していく。しかしながら、故意と思えるほどに、Miltonはキリスト教の固有名詞（St. Peter, Christ）を避け、飽くまでも羊飼いと羊や水のイメジャリを前面に描き出して、古典の歌として仕上げようとしている。

第3楽章の初めを飾る花々のリストに続いて、花を撒き散らすべき墓が空であり、Lycidasの遺体の行方の知れないことを思うくだりがある。"Wash far away"（155）という言葉には、波がLycidasの身体を遠くへさらって行ってしまう、ということにとどまらず、今繰り広げられたばかりの色も香も多種多様の花の数々をさえ波に乗せて運び去って行くような勢いがある。同時に、*The Book of Psalms*（『詩編』）の"Wash me throughly from mine iniquity, and cleanse me from sin"[11]や"Purge me with hyssop, and I shall be clean; wash me, and I shall be whiter than snow."[12]から、『黙示録』に描写される勝利者である夥しい大群衆が身に着けた白い衣につながる「洗い清める」という意味も重なっている。

> These are they which came out of great tribulation, and have washed their robes, and made them white in the blood of the Lamb.[13]

つまり、肉体を滅した水は魂を浄める水に変ると言えよう。前掲の『黙示録』の引用箇所に続く"God shall wipe away all tears from their eyes"[14]は、そのまま*Lycidas*の"wipe the tears for ever from his eyes."（181）に反映されている。そのため、"Weep no more"（165）と、それまでの悲嘆の調子（"He must not float upon his watery bier / Unwept"（12-3）や

Thee shepherd, thee the woods, and desert caves,
With wild thyme and the gadding vine o'ergrown,
And all their echoes mourn. (39-41)

や“daffadillies fill their cups with tears” (150)) を決然と変えることになり、“For Lycidas is dead, dead ere his prime (8)”や“now thou art gone, / Now thou art gone, and never must return!” (37-8) は、“Lycidas your sorrow is not dead” (166) と全く反対の言葉に取って代る。古典の pastoral elegy の世界は、『黙示録』に描かれたキリスト教の来世の vision、新しいエルサレムでの新生へと移行していく。その復活の力は “the dear might of him that walked the waves” (173) に拠るものであり、キリストのみが持つ。この部分は、この詩の数多い水の描写中、神の臨在と力を示す唯一のものであると言える。Milton は *Nativity Ode* の “birds of calm sit grooding on the charmed wave” (68) と同様、神の霊は水上にあるものとして捉えるのを好む。[15]

キリストが波の上を歩いたのは、嵐の Galilee (ガリラヤ) 湖上で、ペトロらの乗った船は風に波に弄れていた。荒れる波風に木の葉のように揺れる船の中でおびえる弟子たちと、好奇心から湖上に足を踏み出して溺れかけるペトロとを助けるキリストの超自然の力を示す場面である。

> And when the disciples saw him walking on the sea, they were troubled, saying, It is a spirit; and they cried out for fear. But straightway Jesus spake unto them, saying, Be of good cheer; it is I; be not afraid. And Peter answered him and said, Lord, if it be thou, bid me come unto thee on the water. And he said, Come. And when Peter was come down out of the ship, he walked on the water, to go to Jesus. But when he saw the wind boisterous, he was afraid; and beginning to sink, he cried, saying, Lord, save me.[16]

これは別の折の類似の事件、風も海も従えるキリストの姿[17]とも結びつき、たとえ King の溺死は嵐によるものではなかったにしても、その時、キリストがいたら、彼は死ななかったであろうに、と言う声が聞こえてくる。第1楽章で Nymph たちに、一体どこにいたのだと問い、いてくれさえしたらと言いかけて、その思いを “I fondly dream!” (56) と打ち消し、“Had ye been there —— for what could that have done?” (57) と反問する。そして、息子 Orpheus をさえ救えなかった Muse の無能ぶりをあげつらい、単に我が子にとどまらず、“thankless Muse” (66) は彼女に仕える詩人たちに恩顧を与えないことをかこち、古典文学の伝統に基く真摯な詩人としての努力の儚さ、虚しさ、報いのなさを嘆く。Muse という異教の詩神への献身に専念していたら、Orpheus の運命は

King にふりかかったように、やがて Milton 自身も辿らされるものなのではないかという危惧がにじみ出ている。この考えは後年 *Paradise Lost* 第 7 巻巻頭の Muse と Urania との比較に明白に表わされる。

Descend from heaven Urania, by that name
If rightly thou art called, whose voice divine
Following, above the Olympian hill I soar,
Above the flight of Pegasean wing.
The meaning, not the name I call : for thou
Nor of the Muses nine, nor on the top
Of old Olympus dwell'st, but heavenly born,
Before the hills appeared, or fountain flowed,
Thou with eternal Wisdom didst converse,
Wisdom thy sister, and with her didst play
In presence of the almighty Father, pleased
With thy celestial song ····

··· nor could the Muse defend
Her son. So fail not thou, who thee implores :
For thou art heavenly, she an empty dream.[18]

しかし、"Had ye been there" は「たとえいたとしても」と同時に、「もしいてくれたら」をも意味し、"Lord, if you hadst been here, my brother had not died"[19] というベタニアの姉妹マルタとマリアの切々たる言葉に結びつく。兄ラザロの死後 4 日目に訪れたキリストに向かって二人が続けさまに発する痛恨の言葉である。それに対するキリストの答えは、"Thy brother shall rise again"[20] であり、続くキリストとマルタの問答は、新約聖書の中でも復活に関する重要かつ本質的部分である。[21] 次のキリストの言葉は、死者の埋葬時に読まれるものであり、King の葬儀にも読まれたのではないだろうか。

Jesus said unto her, I am the resurrection, and the life : he that believeth in me, though he were dead, yet shall he live : And whosoever liveth and believeth in me shall never die. Believest thou this?[22]

このようにみると、古典ギリシア・ローマのイメジの濃い第 1 楽章にもすでに、異教の詩神 Muse への不信のうちに、キリスト教の死者の復活への確信が暗示されていることが分かる。

火にかかわる神の臨在のイメジは、丁度、水が火を消してしまうように、水のイメジャリの支配するこの詩では影をひそめている。旧約の神の預言者たちの出会いに伴う、

烈々と燃える火は登場しない。ただ、太陽に関するものは、*Lycidas* の初めから終りまで、水の描写に拭い去られることなく続き、しかも、第3楽章では、重大な復活の比喩を構成している。

> So sinks the day-star in the ocean bed,
> And yet anon repairs his drooping head,
> And tricks his beams, and with new spangled ore
> Flames in the forehead of the morning sky:
> So Lycidas sunk low, but mounted high,
> Through the dear might of him that walked the wave. (168-71)

水底深く沈んだ Lycidas も、たとえ大海原に没しようとも必ず再び朝の空に輝く太陽のように、蘇える。ただし、それには「波の上を歩いた人」、キリストの力が不可欠であることが付け加えられる。旧約の神の顕現の光とは異り、穏やかな光であり、“Flames” (171) という語さえ、前後に用いられている “ocean” や “waves” によって、洗われたかの如き柔かい光を放つ。“blaze” (74) という、より強烈な火炎を示す語は、束の間の燃焼を暗示する名声の描写に使用され、あたかも異教の太陽神、詩神である Phoebus から発するかのような印象を与える。第1楽章の Phoebus と blaze との結びつきは、第3楽章のキリストと flame との関わりと巧みに対照させられている。

その太陽も、無骨な牧人 Milton が弔問歌を奏でているうちに、静かに傾いていき、詩の終りには、西の入江に没する。“Phoebus” とも、復活の比喩に用いられた “day-star” (168) とも違って、“the sun” (190) と初めて用いられるのは意義深い。つまり、ギリシア・ローマの古典詩の世界とも、キリスト教の天上の vision とも異なる現実の世界では、西の海に落ちてゆく太陽には、厳然たる死の予感がある。しかし、“Tomorrow” は必ず訪れるのであり、別の森、新しい牧場で新しい歌を歌うという Milton の決意と希望もある。目にも耳にも美しい古典文学の伝統の枠を再現してみせながら、第1楽章では、その守護神であり、inspiration である Muse への不信からくる poet-shepherd の儚さを、第2楽章では、priest-shepherd の堕落、その歌の生気なく、耳障りなこと (“when they list, their lean and flashy songs / Grate on their scannel pipes of wretched straw” (123-4))、天罰の下ることを歌う。志すべきは、第3楽章の天上の歌 “a new song” のみである。従って、牧人 Milton は、『詩編』23の牧場のような新しい牧場へ、死者を復活させる力を持つ詩神を探ねるべく、立ち上がる。

この最後のしめくくりの8行 (ottava rima) には、Brooks と Hardy の言う希望がある。

> We are simply reminded that the vision is one of hope, not yet fulfilled, that the elegy has been composed and delivered in a real world in which suns rise and set, day follows day, the flood remains perilous to all those whom Lycidas has left bebind, and the young shepherd has to bethink himself of the duties of the new day.[23]

しかし、それと共に、*Paradise Lost, Paradise Regained* の巻末同様、壮大な神の救いの業への揺るがぬ信頼にもかかわらず、この世の現実に生きる者の孤独の気配が感じられるのである。

注

Milton の詩の引用は Carey, J. and Fowler, A., ed., *The Poems of John Milton* (Longman Group Ltd., 1968) による。

1) Carey, J. and Fowler, A., *The Poems of John Milton* (Longman Group Ltd., 1968) p. 236
2) Brooks, C. and Hardy, J. E., "Essays in Analysis: *Lycidas*" in C. A. Patrides(ed), *Milton's Lycidas : The Tradition and the Poem* (Holt, Rinehart and Winston, 1967), p. 138
3) Shumaker, W. "Flowerets and Sounding Seas: A study in the Affective Structure of *Lycidas*" in C. A. Patrides(ed.), *op. cit.*, p. 130
4) *The Gospel According to St. John*, xxi, 15-17
5) *Lycidas*, 134-51
6) *The Revelation*, xxi, 4
7) *Ibid*., xxi, 1
8) *Ibid*., xiv, 3 また、*The Book of Psalms*, 33, 96, 98 参照
9) *Ibid*., vii, 16-7
10) *Ibid*., xxi, 4
11) *The Book of Psalms*, 51の 2
12) *Ibid*., 51の 7
13) *The Revelation*, vii, 14
14) *Ibid*., vii, 17
15) *Paradise Lost*, i, 21-2 ; 233-5 参照
16) *The Gospel According to St. Matthew*, xiv, 26-30 また *St. Mark*, vi, 48-51 参照
17) *St. Matthew*, viii, 23-7 ; *St. Mark*, iv, 35-41 ; *St. Luke*, viii, 22-5
18) *Paradise Lost*, vii, 1-12, 37-9
19) *St. John*, xi, 21, 32
20) *Ibid*., xi, 23
21) *Ibid*., xi, 24-7
22) *Ibid*., xi, 25, 26
23) Brooks, C. and Hardy, J. E., *op. cit*., p. 152